

シルクロード

大古以来、アジアと地中海世界を結ぶ歴史的な東西交易路に与えられた呼び名である。アレキサンダー大王が、漢の武帝が、ジンギスハーンが活躍し、玄奘やマルコポーロがたどった路である。さらに、日本に仏教が伝わり、正倉院の宝物の数々が運ばれてきた。オスマン帝国の栄華を物語る君主の居城トプカプ宮殿に並ぶ伊万里焼の大きな瓶や壺、水差しなどもこの道を通して運ばれたし、奇想天外、波乱万丈な西遊記の舞台もこの地だった。

この地にシルクロードという言葉が初めて用いたのが、ドイツの地理学者リヒトホーフ



（1833～1905）である。彼は 19 世紀後半に、中国の各地を調査し、中国の地理書「中国」を書きあげた。この交易路を行き交ったのは、シルクや宝石の玉、ガンダーラ文化、ペルシャ絨毯、ガラスなどなど多岐にわたるが、その中で最も重要品がシルクであったことに注目し、ザイデンシュトラセン (seidenstrassen) と書き記した。この英語訳がシルクロード (silk road) である。

20 世紀前半まで古代の絹製品、絹取引に関する文書が見つかるのは、中央アジアのオアシス地帯に限られてい

シルクロードデザインのスカーフ

たことから、シルクロードはオアシスを結んだルートを目指していた。

その後、中央アジア全域を調査したリヒトホーフの弟子、スウェーデンのヘダイン（1865～1952）やイギリス人のスタイン（1862～1943）らによって交易路は、オアシスを結んだものだけでなく中央アジアの広い範囲に及び、イラン高原からイラク、シリアに出て海路や陸路でローマに達していたことを明らかにした。その後の研究から中国南方から海に出て東南アジアからインド洋、アラビア半島に至る海路をも加えるようになる。

シルクロードとはいっても、単に東の中国と西のローマ帝国を結ぶ整備された一本の交易路ではない。山間部など通れるところが極端に制限されたところを除けば、大半は広漠とした沙漠や草原で、通ったところが路の状態であった。四方に伸びた網状のようなものであったことが想像される。そして、網の結び目に当たるのが交易の要地で隊商都市に発達し、後に中国、中央アジア、インド、東南アジア各国の大小の都市へと変貌を遂げていった。いくなれば、シルクロードは単なる交易路というより、ユーラシア大陸中央部で暮らす人々の営む交易活動そのもので線というより面に近いものであったと思われる。

シルクロードは、下記の三つのルートにまとめられている。

* 沙漠の路（オアシスルート）

中国西域の天山山脈の北を通るのが「天山北路」で、比較的難易度が低い距離が長くなる。南を通るのが「天山南路」で、沙漠の厳しさに加え 4～5,000m 山地を通る厳しいルートで知

られている。さらにその南に横たわるタクラマカン沙漠の南を通るのが「西域南道」で、最も過酷なルートながら最短ということで利用者が多かったことで知られている。

三つのルートとも程度の差こそあれ「上に飛鳥なく、下に走獣なし。・・・。但だ死人の枯骨を以て、慄慄と為すのみ」と沙漠の厳しい条件下のルートであったことに変わりはない。

* 草原の路（ステップルート）

オアシスルートが利用されるはるか以前から北緯 50 度付近の中央アジアの草原地帯を通る東西交易路が存在していた。モンゴルの草原地帯（ステップ）を横切り、カザフスタンを通りカスピ海一帯を通過してトルコ北部の黒海周辺に達するルートである。ここはフン人、匈奴、突厥などの騎馬民族が活躍した舞台で、物資の交換、情報の伝達などが行われていた。

この地で最も勢力を拡大したのでモンゴル族で、13 世紀にテムジンという一部族長が、君主を意味するハンに推薦されてチンギスハンを名乗り、この一帯の交易を支配し、オアシスルートをも含めて整備、拡大したことが知られている。モンゴルの支配地域は、東は中国から朝鮮半島、西は東ヨーロッパ、南はアフガニスタンからチベットまで及び、世界史上最大の帝国を築き上げた。その最大の武器というか強みは馬であった。馬は最強の軍事力であり、最速の移動手段であった。なかでも、血のような汗を流し、祖先が天馬の子とされる汗血馬で 1 日 500 km 走ると言われた。



騎馬民族の末裔 — カザフ民族の少年

* 海上路（マリムルート）

インド南端を通るルートで、中国福建省から海に出て、東シナ海、南シナ海、インド洋、アラビア海を経てアラビア半島に達するルートである。

隆盛を極めたシルクロードであったが、人間、ウマやラクダで運べる物資は限りがあった。大航海時代に入ると「海」という中途に異民族を介することのない東西交易路で、徐々に取って代われ、衰退に向かっていく。

シルクロードの舞台の沙漠、オアシス、草原さらには騎馬民族、遊牧民も全てが、日本人にとって非日常的なものであり、香しい文化の歩んできた路となると限りない夢とロマンを掻き立てられる。ところが、中国人にとっては、「西出陽関無故人」（西のかた 陽関を出づれば 故人なからん）のイメージで厳しい自然と異民族との抗争の舞台、「西域」であって、シルクロードに抱くものは大きく異なる。中国語では「絲綢之路」と表記している。

<ステップルートと黄金人間>

2001 年、日本山岳会山形支部行事でカザフスタンのカルカラキャンプ行を実施した。ここは天山山脈最高峰、世界最北の 7,000m 峰のホベイダ峰 (7,439m) や三角錐の秀麗な山容で大理石のハンテングリ峰 (6,995m) へのベースキャンプである。インチョンから飛んでアルマティに着いたのは 23 時を過ぎていた。隊員の 2 名が入国審査で外貨持ち込み申告と現金の徹底した突き合わ

せがあった。ぎくしゃくとしており全員通過まで 1 時間以上を要したこともあり、ホテルに落ち着いた時は日付が変わっていた。翌朝、ホテルから見るアルマティは、くっきりと天山山脈の支脈の山々をバックにした美しい街だった。

カザフスタンの人口構成は、カザフ人が 60%、ロシア人が 30%で、スターリン時代に強制移住させられたウクライナ人、ウズベク人、ドイツ人、ウイグル人や韓国人だという。そして、カザフスタンの国籍を持っている人たちをカザフスタン、カザフ人と呼び、カザフ人はカザフ民族と呼び区別している。カザフ人は日本人と非常に似ている。印象としては韓国人や中国人よりも似ており、近親感を覚える。

3 つに大別されるシルクロードでもっとも古いのが草原の道、ステップルートであった。カザフスタン西部、カスピ海と旧アラル海の北方から北緯 50 度に沿ってカザフステップが広がっている。寒冷で強風が吹き抜けるところで樹木は育たず、荒涼とした不毛の大地でステップルートの中心でもある。ここからカザフ高原、アルタイ山脈の南麓をたどり中国に達するルートである。

カザフ高原の南に「リンゴの里」の意味を持つカザフスタンの旧首都、アルマティで、この国立中央博物館の目玉は、スキタイ戦士がゴールドの鎧をまとった「黄金人間」である。アルマティから



アルマティから天山山脈の支脈アラタウ山脈に向かう途中の草原を切り裂く車道

東に 60 km のイシク・クルガンで、紀元前 10～9 世紀のサキ族の古墳から出土したもので Golden Prince-Warrior と紹介されていた。4,000 枚以上の黄金のピ



黄金人間の切手

ースを頭から足の先まで黄金尽くめの装飾は、ステップルートの繁栄ぶりを示すものといえる。このサキ族だが、ギリシャ人のいうスキタイと同一なのか、あるいはサキ族の一派がスキタイとする説もあり、詳しいことは解っていない。そして、発掘は今も続いていた。

シルクロードというと、莫高窟や敦煌文書で有名な敦煌や、沙漠に飲み込まれヘデンによって発見された楼蘭、さらにはウズベキスタンの「青の都」、「東方の真珠」と呼ばれるサマルカンドなど、史上に残る都市がある。いずれも定住農耕民族がつくったオアシス都市である。ところが、ステップルートとなると古い歴史を持ち、黄金人間が発掘された割には地味に感じられる。その原因は、定住性のないステップ騎馬民族や遊牧民族が主役で、風のように過ぎ去る軍馬や隊商が幅を利かせていたためだろうか。